

峠-朝鮮歌謡文学に見る心の境界線：李朝時調と民謡「アリラン」を中心に

朴，春麗
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494535>

出版情報：比較社会文化研究. 12, pp. 79-89, 2002-10-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



峠—朝鮮歌謡文学に見る心の境界線

—李朝時調と民謡「アリラン」を中心に—

ボク
朴

シュン
春
レイ
麗

はじめに

朝鮮半島の歌謡文学にはしばしば「峠」が登場する。朝鮮半島の人であれば誰もがよく知る有名な民謡「アリラン」はまさにその代表とも言えよう。

アリラン アリラン アリリよ

アリラン峠を 越えて行く

.....

「アリラン」の中心は「峠」である。朝鮮半島には地域ごとに異なる「アリラン」が存在するが、ほとんどの「アリラン」のリフレインは「アリラン アリラン アリリよ アリラン峠を 越えて行く」あるいは「アリラン アリラン アリリよ アリラン峠を 越えさせておくれ」である。「峠」は「アリラン」のキーワードであり、長い歴史の中で歌い継がれてきた強い生命力の源である。

「峠」は「アリラン」だけでなく、その他の多くの朝鮮歌謡文学に見ることができ、特に民謡と時調に多く見られる。また、近代の大衆歌謡、例えば「泣きながら越える朴達峠」、「断腸のミアリ峠」、「秋風嶺峠」のようなタイトルからもその一端を窺うことができる。

それでは、朝鮮半島の人々にとって、「峠」とはいったいどういう意味合いを持つものであろうか。どうして彼らは「峠」にこだわり、あくことなく「峠」を歌いつづけるのであろうか。本稿は、このような問題意識から出発し、朝鮮半島の歌謡文学に見られる「峠」の象徴的意味を、朝鮮半島の風土及び民俗などと関連づけながら考察したものである。日本では、「峠」にまつわる民俗や観念に着目した研究が比較的活発に行われてきたが、朝鮮半島の事例に関しては、特に文学方面においてはこうした視点からの考察がこれまで十全になされてきたとは言いがたい。そこで本稿では、朝鮮歌謡文学のうち特に「峠」が多く見られる李朝時調と民謡「アリラン」を例に取り上げ、そこでの

「峠」の象徴性の分析を通じて、朝鮮歌謡文学とそれを取りまく朝鮮半島の文化における「峠」の意味合いを明らかにしたい。

一 峠にまつわる朝鮮半島の民俗風習

本論に入る前に、まず峠にまつわる朝鮮半島の民俗風習を概観しておくことにする。

1、ソナン堂峠

近代以前、朝鮮半島の多くの峠には、「ソナン堂」という累石壇があった。このような峠を「ソナン堂峠」もしくは「堂峠」と言うが、峠を越える際、人々はこのソナン堂の前で簡単な通過儀礼を行なった¹。ソナン堂は城隍神を祀るためのものであるが²、城隍神は村の守護神であると同時に旅行の神であり³、村落の間の境界の神でもある⁴。

韓国の民俗学者孫晋泰氏は、峠の上の累石壇の起源を、原始時代の狩猟民が自分たちの縄張りを定め、勝手に行き来することができないようにした境界標識として見て⁵いる。狩猟民にとっては、山が生活の場であったため、その境界を定めてこそ平和共存が可能であり、その境界標識として累石壇を築いたという。そして、その累石壇は同時に彼らの神—山神—を祀る祭壇としても機能していたのである。

朝鮮半島の人々が峠の上の累石壇で通過儀礼を行う風習も、このような境界意識、つまり峠を一つの境界線として認識することに、そのルーツを求めることができる。この場合、「境界」という言葉には二つの意味が含まれるものと思われる。一つは峠のこちら側と向こう側といった水平的境界線である。これは狩猟民が彼らの活動領域、つまり狩猟・生活圏を定める境界標識としての機能である。もう一つは、人間が住んでいる常界と神が住まうとされる聖域

1 形式は様々であるが、石を投げる場合もあれば、唾をかける場合もあり、または松の枝を累石壇に乗せておく場合もある。

2 “ソナン”（서낭）という言葉は漢語の“城隍”に由来し、中国の城隍信仰が朝鮮半島に伝来して、巫教の天神・山神・部落守護神等と習合して形成されたものであるという。詳細は柳東植『韓国巫教の歴史と構造』（ソウル：延世大学出版部、1975）185頁を参照。

3 Emile Bourdaret, *En Corée*, Paris: Plon, 1904, p.74.

4 孫晋泰「長性考」（『朝鮮民族文化の研究』、ソウル：乙酉文化社、1949）238頁。

5 孫晋泰、前掲論文、242頁。

との垂直的境界線である。これは狩猟民が山神を祀るにあたって用いていた祭壇としての機能である。峠の累石壇には、この二つの境界線の機能が重なりあって存在すると言えよう。

旅人が峠を越える際、ソナン堂で行われる通過儀礼においては、この二つの境界線が意識されるものと思われる。峠を越えるということは、峠のこちら側から峠の向こう側へと移動することである。その際、境界である峠で簡単な通過儀礼を行うことによって、峠のこちら側で自分に取り憑いたかも知れぬ不浄なものを払い落とし、旅の安全を祈るのである。それと同時に、神に祈ることによって、道中の霊鬼や盗賊の被害に遭わないよう、神の加護を求めるのである。そして場合によっては、旅の安全だけでなく、健康・幸運・子孫の長命や村の安泰などをも神に祈願するのである。

これに類似する習俗は、日本の民間信仰にも見出すことができる。峠には古くから荒ぶる神があって、道行く人々を苦しめたため、旅人はそれらの害を避けるために、峠の神々に幣を奉る風習があった。このような行為を「手向け」と言い、「とうげ」という言葉自体これに由来するといえるが、これに関しては、後述の「峠」の語源の節でやや詳しく述べることにする。

もちろん、朝鮮半島のすべての峠にソナン堂が設置されているわけではない。また、すべてのソナン堂が峠に設置されるわけでもない。ソナン堂は、村の入り口、山麓、路傍など様々な場所に設置されている。しかし、村・邑・面・市・郡・道のような行政区域の境界を成す峠には、ソナン堂が設置される場合が比較的多い。慶尚南道地域に現存するものだけでも、ソナン堂は村と村の境界の峠に10箇所、面と面の境界の峠に11箇所、郡と郡、市と郡の境界の峠に11箇所、道と道（慶尚南道と慶尚北道及び他の道）の境界の峠に7箇所ある⁶。1970年以前はより多く設置されていたはずであるが、それ以降道路の開発と整備が進むにつれて、多くのソナン堂峠が姿を消してしまった。

2、峠の上での「断衣儀式」

ソナン堂は必ず一本の大きな樹の下に設置される。この樹を「ソナン木」もしくは「神木」と言うが、近代以前の朝鮮半島においては、花嫁が峠を越えて他村に嫁ぐ時は、必ず峠の上で駕籠を降り、着ている着物の一部をちぎって、ソナン木に掛けておく風習があった。それは花嫁につ

いてくる生家の家神を、ちぎった衣服に乗り移らせ、ソナン木に掛けておくことで、それ以上ついて来ないようにするためだという⁷。

こうしたところにも、峠に対する朝鮮半島の人々の境界意識を窺うことができる。朝鮮半島の人々にとって、峠とは単に村の内と外を区切る境界線であるにとどまらず、家神のように目に見えないものの活動領域まで制限する抽象化された境界線である。

3、峠で草鞋を履き替える風習⁸

道路が整備されず、交通網も発達していなかった時代に、朝鮮半島で物資の流通を担っていたのは、^{ボフサン} 樗負商と呼ばれる担い商人たちであったが、彼らの間では、村と村との境を成す峠を越えるたびに古い草鞋を脱ぎ、新しい草鞋に履き替える風習があった。峠のこちら側と峠の向こう側とは、それぞれ異なる神によって支配されている領域だからである。峠のこちら側で使用していた履物は、峠のこちら側の神に受け入れられ、同化されたものであり、峠の向こう側の神にとっては異物となり、受け入れられないものとして認識されていたため、履いていた草鞋をそのまま峠の向こう側へ持ち越して行くというのは、一種の禁忌であったのだ。

しかもこのような風習は^{ボフサン} 樗負商の場合だけでなく、科挙に赴く書生、任地に赴任して行く官吏、訃報を知らせに行く使い人、公文書を託された駅卒など、遠い旅路に出た者であれば、誰もが守る風習であった。

4、「峠越し」の風習⁹

朝鮮半島の全羅道には「福興峠」という峠がある。長城・井邑・淳昌という三つの郡の境に位置するこの峠には「峠越し」の風習があった。マラリアを病む子がいれば、その子を背負って福興峠まで運んで行き、峠を越えた地点で一旦降ろす。そしてその後、再度背負って引き返すことによって、マラリアの疫神が抜けるという。これが「峠越し」である。

「峠越し」は、単に病気の治癒のみを目的とするのではなく、不浄一般を清めるためのものとしても機能していた。また、若い娘や寡婦に浮気の気配があると感じ取られたり、噂が立ったりする場合も、その娘や寡婦を背負って「峠越し」をすることで、浮気が治まると受け止められていた。

6 詳細は、金奉佑『慶南の峠道ソナン堂』（ソウル：集文堂、1998）の26～27頁を参照。

7 Bourdaret, *op. cit.*, p.74.

8 李圭泰『韓国人の情緒構造』2（ソウル：シンウォン文化社、1994）30～32頁を参照。訳本に尹淑姫・岡田聡訳『韓国人の情緒構造』（東京：新潮社、1995）がある。

9 李圭泰、前掲書、21～23頁。

このように朝鮮半島の人々にとって、「峠」は不幸や病氣、浮気までも取り除いてくれる神秘的な場所であり、峠の向こう側とこちら側は全く異なる異質な空間である。峠の向こう側は、人間社会に害をなす鬼神の住処であり、反社会・反秩序の「負の力」が充満する空間である。そのため、人々は病氣や不浄、不幸などを峠の向こう側に捨てに行くのである。このような発想は、峠を異界と接する境界線として見なすことによって生じたものと言えよう。

以上、ここまで述べたように峠は、人間社会の行政区域の地理的境界線であると同時に、神の活動領域の境界線としても機能するのである。

それでは、いよいよ峠に対する朝鮮民族のこのような境界意識が、歌謡文学の中ではどのように表現されてきたかを考察していくことにするが、その前にまず「峠」の語源について触れておきたい。

二 「峠」の語源的考察

「峠」は日本で作られた漢字であり、意符の山と、上・下（上りと下りとの境目になる所の意）とから成る会意文字である。「峠」の語源については諸説があるが、大きく二つに分けることができよう。

一つは、山の坂道を登りつめた最も高い所、つまり山の上下りの境目は境界と見なされ、境の神、塞の神、あるいは道祖神などが祀られるので、それらの神々に安全を祈って手向けをするとところから、最初は「タムケ」と言っていたが、室町時代になって「トウゲ」になまったという説である。江戸時代から現代までの辞書類はほとんどがこの解釈を踏襲している。古来、日本においても「峠」が一つの境界として認識されていたことがわかる。因みに万葉集の中ではほとんど「たむけ」で「峠」を指している。

もう一つは、山の鞍部を横切って山越えの道が通っているところを「峠」と言うが、山の鞍部を「タワ」と呼ぶことから、そこを越えるので「タワゴエ」、転じて「トウゲ」となったという説である。タワゴエ説が台頭したのは、地形語研究が進んでからのことであって、古くから国学者たちが説いてきたのは峠の手向け説である。

「峠」とほぼ同じ意味を表す言葉が朝鮮語では「고개」である。該当する漢字はなく、ハングル表記を用いるが、この言葉がいつから使われていたかは定かでない。ほかに時調においては、「峙」「嶺」などのような漢字で「峠」の意を表す場合もある。

大野晋氏は『日本語の起源』において、日本語単語の中

の母音 u と朝鮮語単語の中の母音 o が対応する一例として、kuki（日本語）—峠— kokei（朝鮮語）を挙げているが¹⁰、これは朝鮮語の「고개」と日本語の「峠」がもつ語源的関連性を示すものである。朝鮮語の「고개」が日本語の「峠」の言葉形成に影響を与えたのか、それとも日本語の「峠」が朝鮮語の「고개」の言葉形成に影響を与えたのかは不明であるが、両者の間には何らかのつながりがあるものと考えられる。

三 時調に現われた「峠」

「時調」とは、朝鮮半島の伝統的な詩歌形式の一つである。一般に高麗末期にその形態を完成させたとされるこの詩歌は、李朝中期に隆盛を極め、その後はやや低調となるが、近代に入って再び新たな発展をとげ、現代でも一部の人々に愛好されている。歴代王朝において、多くの詩歌が盛衰を繰り返してきた朝鮮半島の芸術史において、時調はもっとも長い芸術生命を持つ代表的な民族詩歌と言えよう。

ところで、時調とは本来歌うものではなく、吟ずるものであった。主に士大夫階級が江湖閑情・忠君思想・人生教訓などをテーマとして、風雅に吟詠するものであった。しかし、李朝後期における庶民階級の台頭にあって、時調は庶民の間でも親しまれるようになり、内容も花鳥風月などの優雅なものから、現実生活における日常的・卑俗的なものへと変化していった。そして従来、ただ朗詠するにとどまっていた時調に新しい曲がつけられ、定型詩というよりは、むしろ歌謡として重要視されるようになった。

本来、時調は次のような三章六句の基本形態を保ち、3・4調もしくは4・4調の音律を繰り返す短詩型であった。

初章	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>3 (4)</u>	<u>4</u>
	第一句		第二句	
中章	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>4 (3)</u>	<u>4</u>
	第三句		第四句	
終章	<u>3</u>	<u>5 ~ 7</u>	<u>4</u>	<u>3</u>
	第五句		第六句	

それが李朝後期に庶民階級にまで親しまれるようになってから、短詩型のままでは彼らの自由奔放な生活感情を十分に盛り込むことができなくなり、定型の形を打ち破り、散文調に長く伸ばす傾向が現われた。しかし、破格の時調と言っても、従来の基本形態を完全に破ったわけではなく、初・中・終章の三章からなる基本原則はそのまま守られ、終章の最初の言葉が三文字である形式もそのまま維持されている。そうして生まれたのが「オツ時調」と「辞説

10 大野晋『日本語の起源』（東京：岩波新書、1957）180頁。

時調」である¹¹。

長詩化した「オッ時調」と「辞説時調」に対して、短詩型のままの時調を「平時調」と言う。これはもともと音楽面における分類であり、「オッ」と「辞説」はいずれも歌い方を指すものであったが、それがそのまま文学ジャンルの分類としても使われるようになった。「平時調＝士大夫時調」、「オッ時調・辞説時調＝庶民時調」とは必ずしも言えないが、「平時調」には士大夫階級のものが多く、「オッ時調」と「辞説時調」には庶民階級のものが多く、したがって、「平時調」には高踏的・詠嘆的・儒学的なものが多いのに対して、「オッ時調」と「辞説時調」には色情的・享乐的・諧謔的なものが多い。

本章においては、庶民階級の時調によく見られる男女の恋情を表現したオッ時調・辞説時調と、士大夫階級の時調によく見られる忠君思想を表現した平時調といった対照的な二種類の時調を取り上げて、これらに現れた「峠」の表象を考察することにする。

1、男女の恋情を詠ったオッ時調・辞説時調に現れた「峠」

前に述べたように、オッ時調と辞説時調は多くが李朝後期に庶民階級によって作られたものとされるが、その特徴は色情的・諧謔的な側面が強いことであり、男女の恋情をテーマとしたものが多いことである。このような時調において、「峠」はしばしば恋する二人の間に置かれた障害物として、または二人の世界を区切る境界線として機能する。

まず、次のような時調を取り上げよう。

바람도 쉬여 넘난 고개
구름이라도 쉬여 넘난 고개
山진이 水진이 海東靑 보라매
쉬여 넘난 高峰長城嶺고개
그 너머 님이 왔다하면
나난 아니 한 번도 쉬여 넘어 가리라

(1113) ¹²

風も休み休み越える峠
雲も休み休み越える峠
山陳、水陳、海東靑、甫羅鷹も
休み休み越える高峰の長城嶺峠
その向こうにあなたが来たと言うならば
わたしは一度も休まず越えて行こう (筆者訳)

「長城嶺峠」とは、全羅南道の長城郡に位置する峠の名であり、「山陳」、「水陳」、「海東靑」、「甫羅鷹」はいずれも空を高く飛ぶ、力のある鷹の種類を指す言葉である。恋人に会うためなら、風も、雲も、鷹たちでさえも休み休みでなければ越えられないという高い峠を、“わたし”は一度も休まず、一気に越えていきたいと言うのである。恋人と離れ離れになって、遠くにいる恋人を思いながら胸を焦がす女の切ない恋情が描かれている。二人の世界は、この長城嶺峠によって隔てられている。峠は二人の間に横たわる愛の障害物であると同時に、二人の世界を隔てる境界線でもある。

この歌は恐らく女性の歌であろう。というのは、「その向こうにあなたが来たと言うならば」という表現から、ひたすら相手を待ちつづける主人公の姿が窺われるからである。封建的な李朝社会において、相手を待つのはやはり女性と考えるのが自然である。そうすると、風も、雲も、鷹たちでさえも休みながらでなければ越えられないという高い長城嶺峠を、女の“わたし”が一気に越えられるはずがない。これはただ一人の女の儂い夢に過ぎない。夢は峠の向こうにある。憧れも峠の向こうにある。愛する人が峠の向こうにいるからである。しかし、現実には恋人の訪れを待ち続けるしかなかったであろう。

恋人に会うためなら、高い峠でも一気に越えて行きたいという女の情熱的な恋を描いたこの歌は、李朝社会という時代背景に照らしてみれば、かなり積極的な恋歌ではあるが、やはり自ら愛を求めていくような自由さはなく、ひたすら男の帰りを待つしかない女の宿命的な運命が描かれている。女として生まれた以上、運命として目の前に立ちだかる社会の峠は、越えようにも越えられないものである。峠は恋する二人を隔てる境界線であると同時に、愛する人にどれほど会いたくてもひたすらその人の帰りを待つしかない女にとって、宿命的な現実と儂い夢との境界線である。

また、次のような時調を一首見ることにする。

님이 오마하거날 저녁 밥을 일지어 먹고
中門나서 大門나가 地方우회 치다라 안자
以手로 加額하고 오난가 가난가
건넌 山 바라보니 거머히들 서 잇거날 저야
님이로다 보선버서 품에 품고
신버서 손에 쥐고
곰비님비 님비곰비 천방지방 지방천방

11 オッ時調：初・中章のいずれかの章を、作者の好みによりいくらかでも伸ばすことができる。終章は従来と変わらない。

辞説時調：初・中章を作者の好みにより長く伸ばすことができる。終章も最初の言葉を除いては、やや長く伸ばすことができる。

12 本稿において、時調作品はすべて沈載完『校本歴代時調全書』（ソウル：世宗文化社、1972）から抜粋した。作品に付した番号は本テキストにおける作品収録番号である。但し、現代語表記に直している。

준디 마른디 갈희지 말고
 워랑충창 건너가서 情엿말 하려하고
 겹눈을 흘깃 보니
 上年七月 사흔날 갈가 벽진 주추리 삼대
 살드리도 날 소겨저다
 모쳐라 밤일시만정 형혀
 낮이런들 남 우일 번 하괘라 (752)

主が来るとの報せあり 夕餉も今日は早く済ませ
 中門出て 大門出て 木戸の敷居に座りこみ
 額に手をばかざしては 来るか来ぬかと
 向かいの山を眺めればおぼろに見える立ち姿
 あれこそ主だわ 足袋は脱いで懐に
 靴は脱いで手に持って
 あわてふためき一目散 ぬかるむ道も物かはと
 あたふたあたふた駆け寄りて つもる話をしまほしと
 流し目送りゃこりゃ恥ずかしや
 去年の七月三日の日に 剥き取っておいだ麻茎が
 しらりとわたしを騙したわ
 幸い 時は夜のうち
 もし昼ならば笑いのもの¹³

恋人が来ると言うから、早く夕飯を済まして、門の外に出て待っていたが、気が焦ったあまりに、麻茎を彼と見間違えてしまう。辞説時調の諧謔性をうまく生かした作品である。

「峠」の代わりに「山」が登場するが、ここでの「山」は機能面では「峠」と等価である。愛する人は「山」の向こうから「山」を越えてやって来る。「山」は二人の間に置かれた障害物であると同時に、二人が住む場所の地理的境界線でもある。しかしこの時調において、「山」が意味するものは単にそれだけではない。“主が来るとの報せあり”という表現から見れば、“主”たる人は人を使って事前に連絡していたようである。そうすると、“主”は庶民階級の人というよりは両班階級の人である可能性が高い。そして“主”が自分のくることを公然と事前に知らせておくことができる相手の“わたし”は、庶民の女性か妓生、殊に妓生である可能性が高いと言えよう。ほとんどの辞説時調がそうであるように、この辞説時調も李朝後期のものと思われるが、李朝時代の妓生たちは通常一つの村に集まって暮らしながら、自分の一軒家を構えて商いをしていた。彼女たちの住んでいる村は“妓生ドンネ”(妓生村)と呼ばれていたが、妓生ドンネは多くの場合、山や峠など

によって普通の人たちの住む村とは切り離されていた。

したがって、「山」や「峠」は普通の人たちの住む村と妓生ドンネを隔てる物理的境界線であると同時に、彼らの身分の境界線でもある。早く“主”に会いたいあまりに、麻茎を“主”と見間違えるほど焦っていても、“わたし”が自らこの境界線を越えて“主”を求めていくことはできない。“主”は両班として「山の向こう側」の人であり、“わたし”は妓生として「山のこちら側」の人だからである。たとえ“わたし”が妓生ではなく、普通の庶民の女性だとしても、身分の差がある限り、“わたし”が自らこの境界線を越えて両班の彼を求めていくことは許されなかったであろう。つまり、この時調において「山」は両班と庶民の間に存在する身分の境界線の表象として考えられる。続けて、次のような辞説時調を一首見ることにしよう。

白髮에 환양노난년이 검은 書房을 마초아 두고
 센머리 먹칠하고 泰山峻嶺으로 허위허위 너머
 가다가 卦그른 소낙이에 동정 거머지고
 감든마리 다 회거고나
 그러사 늙은의 所望이라 닐락비낙하더라 (1187)

白髪のみそか女¹⁴ 若い恋人づくりては
 白髪を墨で黒く塗り 泰山峻嶺をふらふらと
 越えて行くとき にわか雨にぱったり遭い
 白いトンジョン¹⁵が黒くなり
 黒かった髪が白くなった
 そうさ 年寄りの望みのゆえ 叶うかどうか

(筆者訳)

これもやはり、辞説時調の諧謔性をうまく生かした歌であるが、ここでは「峠」が「泰山峻嶺」の形で登場している。白髪のみそか女が峠の向こう側の恋人に会うために、若作りをしてふらふらと「泰山峻嶺」を越えて行く。しかし道中にわか雨に遭って、せっかく若作りした格好が台無しになってしまう。

「泰山峻嶺」とは、もともと高い山と険しい峠を指す言葉であるが、この時調においては、まず、この恋の難儀さや試練を暗示するものとして考えられる。白髪のみそか女と若い男の恋というのは、李朝社会を支配していた儒教思想から見れば、あまりにも道ならぬ恋である。ここでの「峻嶺」は自らの恋情と社会通念との落差の表現でもある。

また、恋の性質は異なっても、恋する男女が峠の両側に

13 金思燁『朝鮮のこころ』(東京：講談社、1972)の田中明氏の訳を参照した。

14 姦婦。

15 朝鮮民族の民族衣裳の衿。真っ白であることが特徴。

分かれており、「峠」が二人の世界を区切る境界線として機能している点においては、上の二首と軌を同じくすると言える。

しかし、この時調の「峠」にはもう一つ見過ごすことのできない象徴的意義が存在する。それは李朝社会における道德／不道德の境界線の表象であり、常識／非常識の境界線の表象である。峠のこちら側は三綱五常を守るべき倫理の世界であり、峠の向こう側は人倫に背いても構わない、不義の許される世界である。つまり、峠のこちら側は常識と道德の世界であり、峠の向こう側は非常識と不道德の世界である。峠のこちら側では常識と道德に背くと見なされることでも、峠の向こう側では通用し、実現が可能である。

そして、辞説時調の特徴の一つである諧謔効果を狙って「にわか雨」が詠われるが、これも決して諧謔効果だけを狙ったものではない。これは儒教思想が強調した三綱五常の表象であり、道ならぬ恋に対する社会の制裁であり、無情に振り下ろされた鉄鎚である。「峠」と「にわか雨」の組み合わせは、決して偶然ではないのである。

以上、男女の恋情を詠ったオッ時調と辞説時調に現れた「峠」の表象について考察してきたが、これらの時調に共通しているのは、いずれも恋する男女が峠の両側に分かれており、どちらかがこの峠を越えないかぎり、二人は会うことができないということである。つまり、峠は恋する男女の間に置かれた愛の障害物であると同時に、二人の世界を区切る境界線である。また、峠はそれだけでなく、現実／夢の境界線の表象であり、両班／庶民、道德／不道德、常識／非常識の境界線の表象である。(図1を参照)

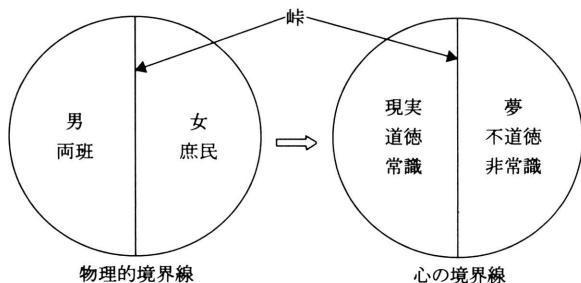


図1 男女の恋情を詠ったオッ時調・辞説時調において

2. 忠君思想を詠った平時調に現れた「峠」

オッ時調と辞説時調の多くが庶民階級のものであり、内

容上男女の恋情を詠ったものが多いのに対して、平時調の多くは士大夫階級のものであり、内容上、江湖閑情・忠君思想・人生教訓などを詠ったものが多い。平時調において「峠」は、忠君思想を詠ったものによく見られる。

まず、次のような時調を取り上げよう。

青石嶺 지나거나 草河溝 어디메오
胡風도 참도찰사 구즌 비난 무슴 일고
뒤라셔 내 行色 그러내여 님 거신의 드릴고
(2875)

青石嶺を過ぎたか 草河溝はいずこか
胡風が肌に冷たく 心なき雨が恨めしい
誰が 我が姿を筆にし 主に伝えてくれるのか
(筆者訳¹⁶⁾)

この時調は李王朝十七代目の王である孝宗 (1619～1659) の作品であるが、丙子胡乱¹⁷の後、当時王子であった彼は人質として八年間奉天 (現在の中国瀋陽市) に抑留された経験をもつ。帰国して即位した後、彼は雪辱を果たすべく清を伐つ準備を進めていたが、在位十年にして没し、その志を果たすことはできなかった。

この時調は彼が奉天へ連行される時に詠ったものと見られる¹⁸。「青石嶺」は中国遼寧省の東北部にある峠の名であり、「草河溝」も朝鮮半島との国境の近くにある中国の地名である。孝宗は奉天へ連行される途中この二ヶ所を通っている¹⁹。「胡風」とは冷たい「北風」、もしくは厳しい「清国の風」の意であろう。王子から人質の身へと転落し、敵国のもとに連行される作者の悲痛な心情を、この「胡風」は表している。

韓国語の「님」(主)は、もともと恋人もしくは愛しい人を指す言葉であるが、士大夫時調においてはよく君主を指す言葉として使われる。この作品においても、「님」(主)は君主つまり父王を指す。作者は自分の惨めな姿を、誰か筆にして父王に伝えてほしい、と言うのである。

作者の胸中において「青石嶺」は一つの境界線であったと思われる。この境界線を越えれば、その向こうは今まで自分が住み慣れた王都とは全く異なる世界である。境界線のこちら側は祖国であり、この国で自分は王子であったのに対して、境界線の向こう側は敵国であり、その国で自分は人質となる。だから、境界線のこちら側は温かく幸せな

16 尹学準『朝鮮の詩どころ』(東京：講談社学術文庫、1992)の田中明氏の訳を一部参照した。

17 1636年、丙子の年に清軍が朝鮮半島に侵入した事件。

18 「丙子胡乱、清兵陷江都、執之以去、中途恋之、不能忘、作此歌。」(『樂府』高大本)

19 「自義州二十五里九連城、六十五里湯站、六十三里鳳凰城、五十四里通遠堡、三十里草河溝、三十里連山關、六十里青石嶺、八十里遼陽…」(『入瀋路程記』)

世界であったのに対して、境界線の向こう側は冷たい悲しみの世界である。つまり、作者にとって「青石嶺」は、祖国／敵国、幸福／不幸、温かい世界／冷たい世界の境界線である。

また、次のような時調を見ることにする。

鐵嶺 노푼 峯에 쉬여 님난 저 구름아
孤臣 冤淚를 비 사마 띄여다가
넘겨신 九重深處에 뿌려 불가 하노라 (2823)

鐵嶺の聳える峰を 休みながら越えるあの雲よ
孤臣^{うら}の冤みの涙を 雨となして載せて行き
主のいる九重の宮居に 降り注いでおくれ
(筆者訳)

この時調は、李朝中期の重臣であった李恒福（1556～1618、雅号は白沙）の作品である。著名な文人であり、且つ政治家であった彼は、光海君十年（1618）の廢母事件²⁰で王の不興を買い、咸鏡道北青に流され、配所で没した。

「鐵嶺」は江原道と咸鏡道の境にある峠であるが、上の時調は作者が咸鏡道北青の配所へ送られる途中、この峠を越えながら詠ったものとして有名である。光海君も後日この時調を聞き、悲しみの涙を流したが、その時既に作者は帰らぬ人となっていたという²¹。「孤臣」は君主に見捨てられた臣、つまり作者自身を指し、「冤^{うら}みの涙」は廢母事件の冤罪のため流す涙を意味する。

作者にとって、「鐵嶺」は一つの境界線であったに違いない。今まで作者が暮らしてきた「峠」のこちら側は君主の恩寵があって、明るく、温かく、幸せな世界であった。しかしこの峠を越えてしまえば、その向こう側は配所という、暗く、冷たく、辛い世界である。それゆえに、「峠」を越えて行く作者の気持ちは尽きることのない悲しみでおおわれていたに違いない。

「鐵嶺」は決して単なる物理的境界線だけではなく、作者の心の境界線となったのである。

このように、士大夫階級の平時調においても、「峠」はやはり物理的境界線であると同時に、心の境界線でもある。男女の恋情を詠ったオッ時調・辞説時調において、「峠」が男／女、両班／庶民の境界線の表象であり、現実／夢、道德／不道德、常識／非常識などの境界線の表象であるのに対して、士大夫階級の平時調において、「峠」は祖国／異国、宮廷／配所の境界線の表象であり、それはまた大きく内／外といった彼我の境界線として見るができる。境界線の内側は温かく、明るく、幸せな世界であるのに対して、外側は冷たく、暗く、不幸な世界となるのである。（図2を参照）

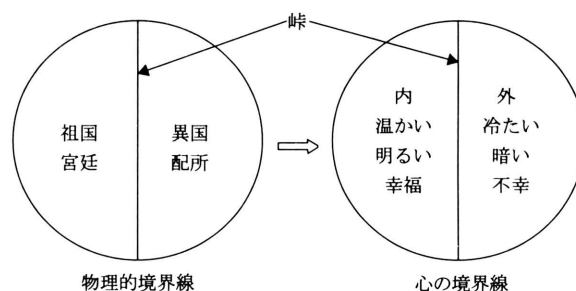


図2 忠君思想を詠った平時調において

四 民謡「アリラン」に現れた「峠」

1. 「アリラン」と「峠」

既に言及したように、朝鮮半島の人々と「峠」の関係を考えるとき、時調以外にもう一つ忘れてはいけないのが彼の有名な民謡「アリラン」である。朝鮮半島には186種、2277連の「アリラン」が伝えられていると言われるが²²、旋律は地方によって異なり、歌詞も時代・地方によって多様である。歌の内容は男女の恋と離別、嫁暮らしの悲哀といった個人的な感情を詠うものから、政治を批判し、社会を風刺するものまで、実に内容豊かである²³。

「アリラン」がいつごろ発生したかは定かでないが、「アリラン」が文献上多く現れるのは李朝末期であり、本

20 李王朝第十五代目の王である光海君が、先王の正室であった仁穆大妃を廢黜、幽閉した事件を指すが、李恒福はこのことに反対した。

21 「登鐵嶺作歌曰、鐵嶺 노푼재에 자고가 ……此歌傳播都下宮人皆唱。一日主遊宴後庭酒酣、聞此曲問誰作。宮人以實對、主愀然不樂因泣下、罷酒而終不能召還」（『燃藜室記述』卷之二十）

22 朴敏一「アリラン文学の特性」（『民謡論集』第3号、ソウル：民謡学会、1994）154頁。

23 朴敏一氏は『韓国アリラン文学の研究』（春川：江原大学校出版部、1990）において、「アリラン」を地域別と主題別に分類しているが、その比率は次のようである。

地域別：

江原道：50種、1074連 慶尚道：31種、222連 ソウル・京畿道：22種、150連 全羅道：20種、389連 忠清道：18種、100連

北朝鮮：20種、181連（咸鏡道：10種 平安道：6種 黄海道：1種 その他：3種） 地域外：25種、161連

主題別：

愛情：579連（25.43%） 遊楽：435連（19.10%） 別離：258連（11.3%） 相思：141連（6.19%） 愛国：134連（5.88%）

風流：118連（5.18%） 結婚：112連（4.92%） 嘆老：90連（3.95%） 自立：82連（3.60%） 性戯：38連（1.67%）

その他：290連（12.74%）

格的に多くの人に親しまれるようになるのは日本植民地初期、特に1926年に羅雲奎の映画『アリラン』が上映されてからである。しかし、「アリラン」の原型は李朝初期に既に存在したといわれる。李成桂が高麗を滅ぼし、李朝を開いた時、高麗の遺臣七人が旌善地方で隠遁生活をしながら、高麗王朝への忠義を貫いていたが、彼らが亡国の恨を抱いて歌った「旌善アリラン」が「アリラン」の原型であるというのだ²⁴。ソ・ジョンハ氏の「関東地方の民謡に関する研究」²⁵、朴敏一氏の「アリラン文学の特性」²⁶、シン・ギョンリム氏の「民謡紀行8」²⁷はいずれもこの高麗遺臣起源説を踏襲している。

「アリラン」の語源と由来については、これまで多くの研究者たちが古代から近・現代にいたるまでの歴史資料・伝説などに基づき、様々な学説を展開してきたが²⁸、中には「峠」と結び付いた由来説も一つある。それは李丙熙氏の楽浪説である。

紀元前108年、漢は衛氏朝鮮（紀元前19?年～108年）を滅ぼし、今の平壤付近に楽浪郡を、その南に真番郡、東海岸に臨屯郡、翌年には東海岸北部に玄菟郡の四郡を設置した。漢民族に追われた住民は、なだれを打って南下したが、楽浪郡の平野が尽き、初めて山にさしかかるところが黄海道の慈悲嶺であった。この峠を越えれば、もう故郷の地は見えなくなる。つまり、この峠は住み慣れた故郷とこれから向かう未知の他郷を区切る境界線であったのである。その峠越えの悲痛な記憶が永く朝鮮民族の心に残り、慈悲嶺の別名「アラ」が転音して「アリラン」になったというのである²⁹。

2、「アリラン」に現われた「峠」

それでは、いくつかの具体的な「アリラン」作品を通じて、「アリラン」に現れた「峠」の意味合いを考察することにする。まずは、「アリラン」の原型とされる「旌善アリラン」である。

아리랑 아리랑 아라리요
아리랑 고개 고개로 나를 넘겨주게
눈이 올라나 비가 올라나 억수장마 질려나
만수산 검은 구름이 막 모여든다³⁰

アリラン アリラン アラリよ
アリラン峠々を 越えさせておくれ
雪が降ろうか 雨が降ろうか
土砂降りの長雨になろうか
萬寿山に 黒雲が集まってくる (筆者訳)

上に述べたように、この歌は李朝初期に旌善地方に隠遁した高麗の七遺臣の亡国の恨を詠った歌である。「萬寿山」とは、高麗の旧都松都³¹の寿昌宮にあった築山の名前であるが³²、ある意味では松都のシンボルであり、高麗王朝のシンボルでもある。その上に「黒雲が集まってくる」というのは、目の前に迫ってきた高麗王朝の危機を意味するものである。「雪が降ろうか 雨が降ろうか 土砂降りの長雨になろうか」というのも、間もなく訪れる災難—高麗の滅亡と李王朝の建国—を意味するものである。

そして、「アリラン峠を越えさせておくれ」というのは、過ぎし日に仕えていた王朝を失った遺臣たちが、亡国の恨を抱いて高麗の都であった松都を離れ、地方（旌善）に隠遁する決意を意味するものである。ここに「峠」が登場する。しかし、この「峠」は、松都から旌善へ行く道中に実在する具体的な峠を指すというよりは、国を失った遺臣たちの心の中の峠—住み慣れた都である松都と見知らぬ辺鄙な旌善地方の境界線、つまり故郷／異郷の境界線であり、都／地方、高麗／李朝、過去／現在の境界線である。

次は、誰もがよく知る「本調アリラン」である。

아리랑 아리랑 아라리요
아리랑 고개로 넘어간다
나를 버리고 가시는 님은

24 旌善アリラン祭委員会『旌善アリラン』（旌善郡、1986）

25 서병하「관동지방의 민요에 관한 연구」（『관동향토문화연구』1, 춘천교대, 1977）

26 朴敏一、前掲論文「アリラン文学の特性」。

27 신경림「민요기행 8」（『마당』, 1984年5月号）

28 金棟甲『アリラン』（ソウル：現代文化社、1986）には、「アリラン」の由来について ①助興の言葉に由来するという後叙説 ②“アリラン”という女真語に由来するというアリラン説 ③楽浪郡から南下する交通路の関門である慈悲嶺の名“アラ”の転音に由来するという楽浪説（後述）④三国遺史・三国史記に出てくる朴赫居世の妃閔英の名前に由来するという閔英説 ⑤阿娘の怨鬼説に由来するという阿娘説 ⑥妻との離別を悲しむ意味に由来するという我離娘説 ⑦大院君（1820～1898）が景福宮の重建にあたり、国民に願納銭の寄付を強要したため、国民は「但願我耳聾、不聞願納戸」（我が耳の聾となり、納金徴発の声が聞こえないことを願う）と唱え、いつの間にか“我耳聾”が“アリラン”に訛ったという我耳聾説等、13種類の説が紹介されている。

29 「アリランの歌—吉野ヶ里・魏志倭人伝の世界4」（『朝日新聞』、1989年8月29日夕刊）。郡県による支配体制はその後中国の歴代王朝に引き継がれ、約400年余り続いた。そしてこの中国の支配に終止符打ったのが高句麗である。

30 シン・ギョンリム（신경림）『川に沿って、アリランを求めて』（ソウル：ムニダン、1992）169頁。

31 後に“開城”と改名される。現在の北朝鮮開城市。

32 「在壽昌宮北園、宦者尹彦文聚怪石築假山構小亭、以黃綾被壁窮極奢侈、號曰萬壽」（『新增東國輿地勝覽』卷四「開城府：古跡」）

십리도 못가서 발병난다³³

アリラン アリラン アラリよ

アリラン峠を 越えて行く

私を見捨てて 行くあなたは

十里も行けずに 足を病むことでしょう (筆者訳)

一見男女の離別をテーマとした恋歌に見えるこの歌は、実は1926年に上映された映画『アリラン』³⁴の主題歌である。映画の中では、日本の植民地支配によって生活基盤を失った村人たちが、新しい生活の場を求めて次々と村を出ていくのを、必死で引き止めようとする主人公永鎮が常に口ずさんでいた歌であり、ラストシーンでは鉄橋を爆破して日本官憲に捕われた永鎮が、捕縄姿でアリラン峠を越えて行く時、村人全員が彼を見送りながら歌う歌である。

映画の中で「アリラン峠」は村の入口にある峠の名前であるが、村に出入りする誰もが必ず通らなければならない通路である。主人公永鎮はソウルで哲学を勉強していた。しかし独立運動に参加して逮捕され、残酷な拷問によって精神異常を来し、故郷に戻っていた。彼は村の入口にあるアリラン峠に小石を並べては、黒い服を着た人物（警察）や村人に危害を加えそうな人物を通すまいとする。また、日本官憲と地主の迫害に耐えられなくなった村人たちが祖先の墳墓を後にして次々と村を出ていくのを、このアリラン峠で必死に引き止めようとする。そして、ラストシーンで警察に連れ去られる時、村人に最後の願いを伝える。「どんなに苦しいことがあってもアリラン峠を越えてはなりません。永遠に越えないでください」と。

「アリラン峠」は村の内部と外部を区切る境界線である。峠を越えて行くということは、離別を意味するものであり、一度この境界線を越えて行ってしまえば、いつまた越えて戻ることができるか分からない。もう二度と戻って来られなくなるかも知れない。だから、越えて行ってほしくないのである。

「私を見捨てて行くあなたは、十里³⁵も行けずに足を病むことでしょう」というのは、一見恋人に見捨てられた女の恨み節のように見える。引き止めても引き止めても、冷たく振り払って去っていく相手に、呪いをかけるかのよう

でさえある。しかし、「私を見捨てて行くあなた」は決して単に恋人を見捨てて去って行く薄情な男を指すものではなく、広く親兄弟、親戚縁者、友人隣人、故郷を捨てざるを得ない人たちへと重ね合わせられるものであり、「十里も行けずに足を病むことでしょう」と言うのは、故郷に残る人たちが彼らを行かせたくない気持ち、つまり峠を越えさせたくない気持ちの裏返しでもある。

「本調アリラン」は、羅雲奎によって映画『アリラン』の中で作詞・編曲され、それから民衆の間に広まったものと言われるが、それ以前にもソウルをはじめとする各地で、それほど普遍的ではないにしても、民謡「アリラン」が歌われていたことが、当時の資料から窺い知ることができる³⁶。羅雲奎自身も、幼い頃に鉄道工事現場の労働者たちから聞いた「アリラン」謡にヒントを得て「本調アリラン」を創作するに至ったいきさつを、雑誌『三千里』（1937年1月）の対談で述べている。男女の恋歌に着目することで、当時の朝鮮民族の亡国の恨を訴えたのは、羅雲奎の慧眼あつてのことであった。

3、近代の「アリラン峠」

映画『アリラン』の大ヒットをきっかけに、日本植民地時代に朝鮮半島では多くの「アリラン」が創られ、歌われた。古くから伝わる伝統的な民謡「アリラン」に対して、これらの「アリラン」を「新アリラン」と呼んでいたが、中には次のようなものもあった。

발 잃고 집 잃은 동포들아
아디로 가야만 좋을까 보라
아리랑 아리랑 아라리요
아리랑 고개로 넘어간다
괴나리 봇짐을 짊어나 지고서
아리랑 고개 고개를 넘어간다³⁷

畑を失い 家を失った 同胞たちよ
我々は どこに行けば いいのだろう

アリラン アリラン アラリよ

アリラン峠を 越えて行く

風呂敷包みを 背に負っては

アリラン峠々を 越えて行く

(筆者訳)

33 キム・イヨンガブ(김연)『八道アリラン紀行』(ソウル:集文堂、1994) 325頁。

34 羅雲奎が監督・脚本・主演した映画である。1926年10月1日日本による朝鮮統治の総本山である朝鮮総督府新庁舎の落成式の祝宴が行われる一方、この総督府からさほど遠く離れていない鐘路にある団成社という劇場で封切られたこの映画は、たちまち大ヒットし、2年6ヶ月にわたって全国各地で上映されるという大盛況を見せた。

35 朝鮮半島の1里は約392メートルに当たり、日本の1里の10分の1に相当する。

36 Homer Bezaleel Hulbert (1863~1949、アメリカの言語学者・史学者)氏は初めて「アリラン」を楽譜に採譜した人物であるが、1896年2月に刊行された英字雑誌 The Korean Repository, vol. III, no. 2に“Korean Vocal Music”という題で「アリラン」を掲載し、同誌において、この歌は1883年頃から民衆の間で歌われていたが、その内容と旋律は即興曲の名手である朝鮮人によって数多く置きかえられているため、その種類がどれほどあるのか明らかでなく、その後半部分は同じであると指摘している。

37 チン・ヨンソン(진용선)『中国朝鮮族のアリラン』(ソウル:秀文出版社、2001) 50頁。

生活基盤を失った多くの朝鮮民族が、生きる道を求めて故郷を背にし、中国満州や日本へと流浪の旅を始めた。映画『アリラン』の主題歌が、故郷に残る人たちが故郷を離れて行く人たちに贈る歌だとすれば、この「アリラン」は故郷を離れて行く人たちの歌である。

実際、彼らが中国満州の地に足を踏み入れるためには、豆満江・鴨緑江を渡らなければならなかった。この歌を別名「越江曲」というのも、ここから来ているものと思われる。しかし、歌詞に現われているのは「豆満江・鴨緑江を渡る」ではなく、「アリラン峠を越えて行く」である。それは「アリラン峠」が決してある特定の峠を指すのではなく、豆満江・鴨緑江、すなわち国境を意味し、心の境界線を象徴するからである。

「峠」のこちら側には、もともと自分たちの住み慣れた国があったが、今や何もかも奪われてしまった。もうここには彼らの住むべき場所がない。やむを得ず、風呂敷包みを背に負い、「峠」の向こうを目指して越えて行く。「峠」の向こうには、満州という見知らぬ土地がある。もしかするとそこには、彼らが生きていける道があるかも知れない、という期待と夢を抱いて、必死に「アリラン峠」を越えて行くのだ。

田中英光氏は、「酔いどれ船」(『田中英光全集』二、東京：芳賀書店、1960)において次のように述べている。

アリランというのは、町境、国境の峠のことで、朝鮮の処々にあり、現に京城と龍山の間にもアリラン峠と呼ばれる小坂が一つあるが、元来は異境に落ちる朝鮮人が、故里との別れ目にある高い峠を幻想した伝説の地名であろう。

“アリラン”というのは、町境、国境にある峠のことであり、その峠はそもそも実在するものではなく、異境に落ちる朝鮮民族が、故郷との境目にあると幻想した峠だといふのである。金烈圭氏も『アリラン…歴史であり、民族の声だ』(朝鮮日報社、1987)において、次のように述べている。

事実、私たちの国土の地図を広げて見ると、例えそれが五万分の一に縮尺された地図であろうと、“アリラン峠”というものを見出すことはできない。巷に俗説または俗称として広まっている幾つかの“アリラン峠”があ

るが、別にこれといった峠でもなければ、嶺でもない。峠の多い旌善や平昌邑、アリランの本場として知られたこれら地域の山峡奥地にも、“アリラン”の名が付いた峠はただの一つもない。われわれの生活の中に、歴史の中に求めなければならないのだ。生活に危機があり、歴史に難関があるとするならば、その危機や難関が他ならない“アリラン峠”そのもののなのだ。“アリラン峠”はどこにでもあるものではなく、しかしどこにでもある峠だ。“アリラン峠”はわれわれの生活と歴史にほとぼしる絶望の絶頂であると同時に願望の絶頂である峠、すなわちそのもののなのだ。

つまり、地図に記載された“アリラン峠”というのは何処にも存在しないが、“アリラン峠”は朝鮮半島の人々の心の中に存在する、絶望と希望の境界線である。

朝鮮民族独立運動の先駆者である金山は、中国延安でアメリカの女流作家 Nym Wales³⁸に次のように語っている。

朝鮮には一つの民謡がある。苦しみ悩む人民の生きた心臓からつくり出された、美しい古い歌だ……京城の近くに、アリラン丘という丘がある。李王朝が圧政を布いていたころ……ここが、数百年の長い間、処刑場とされていた……(処刑される)大多数は、圧政に反抗した貧農や、虐政や不正義に反対して闘争した反逆青年であった。

伝説によると、こういう青年の一人が獄中で一つの歌をつくり、自分がアリラン丘を足どりも重く行くときに、その歌を唱った。この歌が民衆に覚えられた。そして、それから後は、死刑の宣告をうけた者が、この歌を唱うことで自分の喜びや悲しみに別れを告げるようになった……だが、死は敗北ではない。多くの死の中から、勝利が生まれることがあるのだ。

朝鮮はもう十二以上のアリラン丘を苦しみながら越えてきた……私の短い半生の間でも、私は、朝鮮が幾つかの丘を登ってきたのを、そしてその度毎に峠の上で見たものが死だけであったのを、実見してきた……しかしまだ終末は訪れていない。われわれはまだ最後の犠牲が勝利をもたらすという希望を捨てていない……今、我々は最後のアリラン峠を越えている³⁹。

38 アメリカの女流作家。エドガー・スノー前夫人。主な著書としては『赤い中国の内幕』(1939)、『中国は民主主義を建設する』(1941)、『赤い塵』(1952)、『西安事件ノート』(1960)、『私の延安ノート』(1961)等がある。

39 Kim San and Nym Wales, *Song of Ariran-The Life Story of A Korean Rebel*, New York: The John Day Company, 1941. 本稿は安藤次郎訳『アリランの歌』(東京：みすず書房、1965)とチョ・ウファ(斗)訳『アリラン』(ソウル：トンニョク、1984)を参照した。

40 1592年、壬辰の年に豊臣秀吉が朝鮮半島に侵入した事件。

壬辰倭乱⁴⁰と丙子胡乱をはじめ、朝鮮半島は何度も外国の侵略を受けてきた。そのたび多くの愛国者たちが、国家の尊厳と民族独立のために血を流し、貴い命を捧げてきた。このことを、金山はアリラン峠を越えることに喩えている。「アリラン峠」は民族独立運動の成就／失敗の境界線であり、民族の存続／滅亡の境界線である。

このように、男女の恋情・郷愁・亡国の恨など様々なものをテーマとしている「アリラン」において、「峠」は常に様々な境界線の表象である。男／女、故郷／異郷、祖国／異国、過去／現在などあらゆる領域の境界線であり、近代においては民族独立運動の成就／失敗、民族の存続／滅亡の境界線へと発展する。つまり、何百年も「アリラン」を歌い続けてきた朝鮮半島の人々にとって、「峠」は地理的境界線であると同時に、心の境界線であったのである。

それでは、どうして「峠」が朝鮮民族の心の大きな部分を占めるようになったのであろうか。朝鮮民族が長い歴史の中で生きてきた朝鮮半島は、その地形から見れば、八割が山地である。しかも三方を海に囲まれているため、沖合遠くへ波をかき分けて行こうとする外向性よりも、山の奥へもぐりこんで安住しようとする内向性が強まるほかなかった。そのため、山に取り込まれた居心地のよい盆地を求めて山の麓に村を作り、都邑を築いて生活してきた。朝鮮半島の地名には「州」という字が付く場合が多い。例えば、朔州、義州、安州、黄州、原州、忠州、榮州、清州、尚州、公州、全州、井州、羅州、晋州、慶州、光州などがそれである。これらはすべてそれぞれの地域の中心地であるが、ほとんどが盆地である。盆地は周りを山に囲まれ、外界との明瞭な境界線によって画された一つの小宇宙である。朝鮮民族は先祖代々、その枠の中で生を営み、またその遠近の血族がその中にともに住み、生存の糧をその中で耕し求め、そして死を迎え、永遠に眠るところも、ほかならぬその小宇宙である。したがって、この盆地の枠は朝鮮民族の心性に強い影響力をもつものとなった。人々の共感しあえる世界はその枠内で完結し、明確に区切られた枠の内と外の通路が峠となっているために、峠が情緒の中に集中されざるを得ないのである⁴¹。

おわりに

朝鮮半島は山が多い地域である。そのため、近代になるまで地理的境界線に山が用いられる場合が多かった。一つの村からもう一つの村へ、もしくは村の内から村の外へ移動するためには、山を越えなければならなかったが、その

時人々が通るのが「峠」であった。つまり、「峠」は村と村、村の内と村の外を区切る地理的境界線であったのである。しかし、「峠」は単に地理的境界線だけにとどまらず、朝鮮半島の人々の心の境界線でもあった。二つの異なる世界を区切る境界線として機能する「峠」は、常に恐怖と期待が交差する場であり、男／女、両班／庶民、道徳／不道徳、常識／非常識、故郷／異郷、過去／現在、祖国／異国、幸福／不幸の境界線であり、近代においては民族独立運動の成就／失敗、民族の存続／滅亡の境界線にまで発展した。

「峠」は朝鮮半島の人々の心の境界線なのである。

41 李圭泰、前掲書、16頁。